

ESD レポート

Education for Sustainable Development

vol. 14

2008 春

2008年3月7日発行

NPO 法人「持続可能な開発のための教育の10年」推進会議

ESDとは「持続可能な開発のための教育=Education for Sustainable Development」の略。社会、環境、経済、文化の視点から、人類が直面するさまざまな課題に取り組み、公正で豊かな未来をつくる「持続可能な開発」—— それを実現する力を、世界各地に生きる私たち一人ひとりが学び育むことをめざして、「国連持続可能な開発のための教育の10年(ESDの10年)」が、2005年からスタートしています。

シリーズ 学びの場をデザインする



チョコレートから世界が見える

——NGOと教員でESD教材を共同開発

(財) アジア・太平洋人権情報センター (ヒューライツ大阪)

ヒューライツ大阪と大阪府立学校人権教育研究会*1では、ESD & 多文化教育教材づくり共同セミナーを4年間にわたり開催してきました。この共同プロジェクトは、ヒューライツ大阪が国際人権教材奨励事業 (AWARD2004 ~ AWARD2006) で収集した国内外の人権教育資料の分析を通じて、日本の学校でも活用できるすばらしい教材の素材を自分たちで発掘し、開発・環境・人権をつなぐESD教材づくりをすすめるというものです。

2005年度には、写真家宇田有三さんのスライドショー「ゴミに生きる人びと」の教材化*2、2006年には、毎日新聞社のビデオ「世界の難民は今」などを活用した難民学習シナリオ(難民体験演劇ワークショップ)、子どもの権利シナリオ(ストリート・チルドレン体験演劇ワークショップ)などの教材開発と実践をすすめてきました。そしてプロジェクト4年目の2007年度に選んだのが、「チョコレート&カカオ」を題材にしたESD教材の開発です。



バナナの葉にバルブごとカカオ豆を包んで約1週間発酵させる。その後、天日乾燥させ、日本やヨーロッパなどに輸送される(資料提供:日本チョコレート・ココア協会、上と左)

カカオの実(カカオポッド)

バルブと呼ばれる甘く白い果肉が堅い殻に覆われている。その中に30~40粒の種子(カカオ豆)がある



チョコレートは飲み物だった!? ワークショップにて意外な歴史を学び合う



<キーワード>

- ・ 開発、環境、人権をつなぐESD教材づくり

<関係者・団体>

- ・ 財団法人アジア・太平洋人権情報センター (ヒューライツ大阪)
- ・ 大阪府立学校人権教育研究会

教材づくりのプロセスもワークショップで

2007年5月からプロジェクト会議を15名のメンバーで月1回開催し、出版物やインターネットでの資料収集、製菓メーカーやフェアトレードショップへの現地取材を実施。この結果、チョコレートやカカオの学習用教材は、コーヒーやバナナ、エビ、パーム油などに比べ日本ではまだ少ないこと、欧米では多くの教材があるが児童労働とフェアトレードに焦点化したものが多いことなどが明らかとなり、開発すべき教材には、それらにプラスした視点を盛り込むことを決めて準備をすすめ、8月に第1回ESD & 多文化教育教材づくりワークショップを2日間で開催しました。^{*3}

第1回ワークショップは2部構成で、第1部は、AVC^{*4}の荒川共生さんをファシリテーターに迎えて「ワークショップ体験：パーム油を取り巻く課題について」を全員で体験（のべ3時間）し、続く第2部で、「チョコレートから世界が見える」教材づくりに挑戦しました（のべ9時間）。まず全員でビデオ「100人の地球村～ガーナのカカオ農園で働く子ども」（フジテレビ、2006年放映）を見て意見交換（メディア・リテラシー）。次に「チョコレートの基礎知識」について学習した後、4つのグループに分かれてキーワードの整理を行い、最終的に「教育」、「グローバリゼーション」、「プランテーション」の3つのキーワードで自前の教材づくりに挑戦。それぞれの「チョコレート教材」を報告し、評価を行いました。

その後、プロジェクト会合を3回開催し、12月の第2回教材づくりワークショップ「チョコレートから世界が見える part 2」で開発された教材の体験を参加者全員で行いました（30名規模で4時間）。

ワークショップの流れ（4部構成）

- ①チョコレート・クイズ（15問）とチョコレート食べ比べ
- ②ビデオ「100人の地球村～ガーナのカカオ農園で働く子ども」を見て話し合い
- ③ロールプレイ「チョコレートと私たち～カカオ生産・加工・流通・消費の立場から」
*「カカオ農園で働く子ども」、「カカオ農園主」、「チョコレートメーカー」、「フェアトレードにかかわるNGO」、「日本の消費者」の5つの役割に分かれ、グループで作戦会議。それぞれの立場の要求を出し合い、悪者探しではなく、全員が納得できる解決策をめざす
- ④ふりかえり

このワークショップの成果をふまえ、2時間バージョンのワークショップ・プログラム「チョコレートから世界が見える」ができあがりました。

世界と私たちのつながりに気づくESD教材

できあがったプログラムは、08年2月2日に大阪市で開かれたワン・ワールド・フェスティバル^{*5}で公開しました。ESDセミナー「チョコレートから世界が見える」ワークショップには、学校関係者やNGO、学生など60名が参加し、2時間という短時間でしたがとても盛り上がりました。ワークショップの流れは、第2回と同様ですが、とくに「チョコレート・ク

イズ」と「ロールプレイ」は、参加者にとっても好評でした^{*6}。

私たちに身近な食べ物のチョコレート。どんな人々が生産・流通・加工・販売・消費にかかわっているのかを探りながら、私たちと途上国の人々とのかわりを感じる今回の試みは、大きな成果を収めましたが、このワークショップに続く発展学習の整備も課題としてあります。今回開発した教材をさらに改良してさまざまな場面で活用できるものへと発展させ、今春には完成版「チョコレートから世界が見える——環境・開発・人権をつなぐESD教材」（仮）を刊行していきたいと考えています。

（文責：前川 実）

*1 大阪府立高校など約200校が加盟する研究会組織。
<http://homepage2.nifty.com/furtsujinken/>

*2 ヒューライツ大阪編『ゴミに生きる人びと—環境・開発・人権を考えるヒント集—』2005年、解放出版社、1,500円

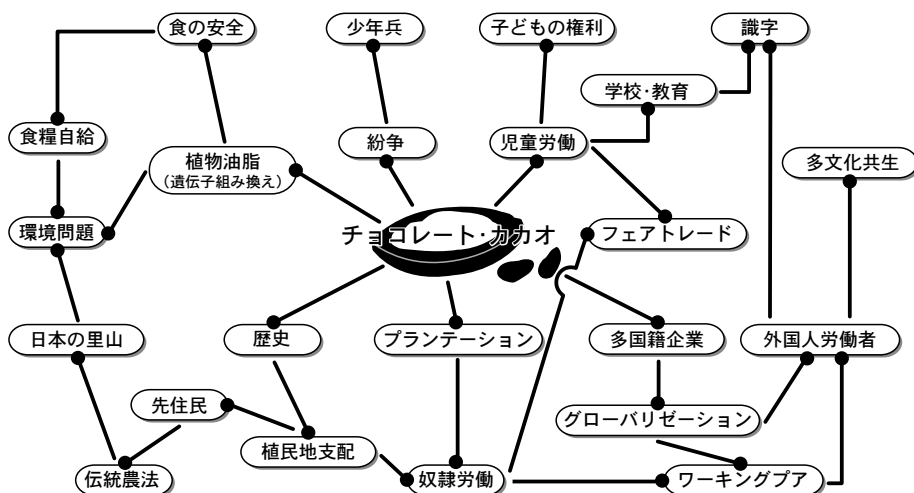
*3 ワークショップの詳細は、以下のHPを参照。
<http://www.hurights.or.jp/event/rpt07/e17.html>

*4 大阪に本拠を置くNPO法人アジア・ボランティア・センターの略。<http://avc.or.jp/>

*5 関西一円のNPO/NGOや政府機関、国際機関、企業など1万5000人が参加した国際協力のお祭り

*6 参加者の声
 ・日常生活でもとても身近なチョコレートだから、消費者の行動で世界を変えることができると改めて思った（学生）
 ・それぞれの立場で話をすることで、一筋縄ではいかない複雑さがよくわかった（NGO）
 ・途上国で労働を強いられる子どもの役をしました。子どもは主張したくても、主張する場所や相手が限られていて、本当に弱い立場だと思いました。途上国の教育援助にかかわった一人として、子どもにとっての学びの場、学校という空間は、途上国といわれている国の人たちにとって生死を分けるほど大切だと思いました（教育関係者）

「チョコレートから世界が見える」～発展学習キーワード



作：桜本哲也

ESD 的な要素抽出 from チョコレートから世界が見える

- | | |
|------------------|---|
| 育みたい
価値観やスキル | <input type="checkbox"/> 自分で感じ、考える力
<input type="checkbox"/> 世界とのつながり（相互依存）への気づき
<input type="checkbox"/> 社会的公正の実現（国際的な人権基準）への行動力
<input type="checkbox"/> 人権にもとづくアプローチ（Rights Based Approach） |
| 重視されている
学びの手法 | <input type="checkbox"/> 参加・体験で主体的に学び、自分の意見をまとめる
<input type="checkbox"/> 多様な価値観（世代、職業、立場）にふれ共に学ぶ
<input type="checkbox"/> ステレオタイプをなくし、柔軟に発想する |

財団法人 アジア・太平洋人権情報センター
 （ヒューライツ大阪）

住所 大阪市港区弁天 1-2-1-1500
 オーク1 番街 15 階
 電話 06-6577-3578

http://www.hurights.or.jp/index_j.html

ESD-J 理事からのメッセージ

ESDの10年をとし、われわれはなにを実現すべきか？
私はこう思う――。

ESDでエコロジカルコミュニティを～学び、変化し続ける社会をめざして



NPO 法人 当別エコロジカルコミュニティ 山本幹彦

私たちは、NPO 法人 当別エコロジカルコミュニティ（以下、TEC と略）を設立した 2002 年、「エコロジカル」の定義を（1）自然との共生、（2）公正な社会、（3）個人の自己実現とし、このようなエコロジカルなコミュニティをめざした教育の開発をミッションとしました。まさに、TEC は ESD そのものとして活動が始まりました。その後、この ESD の 10 年事業がスタートし、10 年というよい区切りができたと思えました。

＊

TEC が事務所を置く石狩郡当別町は田園風景が広がる農村で、町の真ん中を当別川が流れ、その流域のすべてが一つの行政区になっているユニークな場所です。また、上流部には北海道が整備した日本で最大規模の森林公園があり、「環境の村」という北海

道の環境教育のフィールドもあります。

TEC ではこのフィールドすべてを使い、体験を中心とした環境教育を行いながら、現場で汗をかきながら ESD を考えていこうと活動を行っています。私たちも現場で体験しないと学べないのでから。

＊

現場で一番気になることは、子どもたちの学びの意欲の低下です。

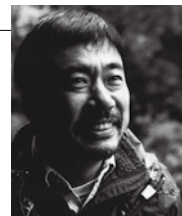
学びとは変化すること。でも、誰もが変化に対して躊躇したり、恐怖心をもちますよね。自分自身が変わっていくことを支え、励まし、その道筋を教えてください、まさに教育は学び方、別の言い方をすると、変わり方を学ぶことが大きなテーマだと思います。今までの自分とちがう自分を受け入れる。新しい知識を学んだときのワクワクする気持ち、人との

ちがいから自分の考え方や行動を見直す心細さや楽しさ、また、変化し続けるコミュニティの危うさと可能性……。

持続可能な社会のイメージからは、あるべき社会像を想像しがちですが、変化し続ける個人や社会をめざしていくことが ESD ではないかと考えています。この 10 年、学校や社会でできる教育内容や手法、指導者の資質や能力を考えながら現場で汗を流し続けます。

ESD-J 理事。

1956 年京都市生まれ。20 年間にわたり（財）京都ユースホステル協会で仕事をした後、2000 年の春に家族と北海道へ移住。2002 年に NPO 法人 当別エコロジカルコミュニティを設立し代表を務める。環境教育、体験学習、ソーシャルワークが活動のキーワード。



怪物「グローバルエコノミー」に立ち向かうものは、だれか。



NPO 法人 エコプラス 大前純一

「持続可能な」という言葉が政治の世界でも、はやり始めているようです。

福田首相の施政方針演説（1月18日）にも登場します。政治家の口からこういう言葉がでてくるのはうれしいのですが、福田首相は「持続可能な社会保障」、つまり年金問題や少子化対策のなかでの持続可能性を語っているにすぎません。

Sustainability という言葉は、西洋社会の文脈では、地球社会全体の成長が無制限には続くことはできない、という視点からきていると思います。

だからこそ、気候変動関連の記事が新聞の一面トップに大きく掲載され、欧州の政治家らが温暖化対策で競って、挑戦的な課題を提示しているように思えます。

＊

翻って、日本の状況はどうでしょうか。社会保障も、昨今話題の道路問題も、地球社会が存続してこそ成り立つ議論であるのに、

自分たちが搭乗している「宇宙船地球号」全体の直近の課題には目を背けて、国内問題だけに目がいつているように思えます。

首相になって海外の政治家との接点で突然環境問題をうたいはじめるのも、昨今の流れです。安倍前首相は欧州訪問の後に、突然「美しい星」構想をぶちあげ、福田首相も G8 は「わが国の環境への取組みを世界に発信するチャンス」としています。

でも、どこかピントがはずれていますよね。

＊

日本の環境対策が優れているが、地球社会の基盤がおかしくなっている。それも気候変動だけが問題なのではなく、気候変動を起こしてすら「成長」は絶対条件として掲げざるを得ない今の社会が問題なのではないでしょうか。

日本車が世界中で売れて、その自動車会社の株価が高くなり、その結果銀行やら証

券会社が好調で、そこに資金を預けている年金などの運用が高利回りで、安定した個人収入からの税収が豊かで、そのおカネで地方に道路工事をする財源が確保できれば、それでいいのでしょうか。

このどこかのリンクが切れれば、一瞬にして社会の構造が崩れる危うさのなかに私たちは存在している危機感こそ、いま社会が認識し学ばねばならないことだと感じています。

ESD-J 理事。

あるときは IT コンサルタント。あるときは市民活動に取り組む元新聞記者。NPO 法人エコプラス理事。25 年余の記者時代は犯罪・汚職、医療、福祉、ハイテクなどを取材。



緊急提言「ガソリン税の上乗せ分は『地球税』に！」へ賛同者募集！

ガソリン税の上乗せ分をどうするか、大きな議論になっています。年間2兆60000億円のおカネで、さらに全国に道路や橋を造り続けるのか、その税金を全額廃止してガソリンを「値下げ」するのか、という議論です。

しかし、地球温暖化が世界的な課題になっている最中に、車のための道路をつくり続けたり、燃料を値下げして消費を奨励するというのでいいのでしょうか。

ESD-Jは、この上乗せ分を地球全体を「持続可能な社会」につくり替えるための「地球のための税金＝地球税」とすることを、1月30日に緊急提言しました。

持続可能な社会づくりのためには、たんなる環境対策以上に、教育や農業、地域づくりなど幅広い取り組みが必要です。毎年毎年景気対策のために消化する既存の予算ではなく、地球のための「基金」として積み上げ、市民もかかわった「推進会議」が機動的な運用を図ります。

このような問題に対して、「持続可能な社会」づくりのために、なにが必要なのか？ どうするべきなのか？ 市民がもっと主体的にかかわり、それらを議論することもESDの大切なアプローチであると考えます。市民の側からもおおいに声を上げて、「持続可能な社会」づくりをすすめてみましょう。



(1) 緊急提言をご覧ください

<http://www.esd-j.org/archives/000617.html>

(2) 団体として、賛同書へご署名ください

(3) 個人として、賛同のメッセージを寄せてください

これまでの賛同団体、賛同者のメッセージも以下に掲載しています

<http://www.esd-j.org/chikyuzei/sando.html>

本件に関するお問い合わせは ESD-J (admin@esd-j.org) 事務局まで

私たちがESD-Jに入ったわけ

企業としてみなさんのお役に立ちたいと思います

東洋製罐（株）資材・環境本部 環境部

当社は金属缶、PET ボトル、プラスチックボトル、パウチなどの広範囲の容器包装を製造しています。当社の製品はみなさんの身近でたくさんご利用いただいているのですが、われわれの直接のお客さんは中身を充填する会社なので、一般の方にはご存じのない方が多いかと思えます。

社会貢献活動に関しては、残念ながら当社は今までに社外にむけての環境教育などの活動を含めて、あまり積極的に行ってきませんでした。しかし、1～2年ほど前から環境部門のなかで、なにかわれわれができることがないだろうかと考えていたところ、別件でESD-Jの事務局の方とお会いする機会があり、みなさまの活動を知りました。なにかから手がければよいか迷っていたところでしたので、今回入会を決めました。

これを機にわれわれ企業としてみなさんのお手伝いができることがたくさんあると思いますので、ぜひご協力をお願いいたします。

2008年1月から2月の活動報告

1月15日	第4回 ESD 学習交流会
1月17日	環境省 ESD 促進事業 地域担当者ミーティング
1月17日	情報プロジェクトチームミーティング
1月21日	ESD 分野連携ワークショップ in とよた セッション1
1月22日	ESD の10年円卓会議 出席
1月25日	第5回ESD国際ネットワークカフェ
1月29日	ESD-J 理事ミーティング
1月30日	緊急提言 ガソリン税の上乗せ分は「地球税」に!
1月30日	理事選挙 公示
2月2日	関東 ESD 実践者交流会
2月4日	ESD 分野連携ワークショップ in とよた セッション2
2月5日	NTT グループ CSR 担当者ワークショップ
2月9日	ESD 担い手ミーティング in 北海道 講師派遣
2月14-15日	環境省 ESD 促進事業 経験交流ミーティング
2月16日	環境省 ESD 促進事業 地域担当者ミーティング
2月18日	ESD 分野連携ワークショップ in とよた セッション3
2月18日	ESD 推進議員連盟 勉強会 出席
2月20日	環境省 環境人材育成ワークショップ 出席



第1回ESDの10年円卓会議のようす

編集後記

「Change」を掲げて、オバマ上院議員が米大統領選民主党指名争いで躍進している。アメリカには世界を「変える」ことよりも、自国が「変わる」ことに力を注いでもらいたいと思う。翻って私たちの国、日本はどうか。変えたいことは？ 変えずに守りたいことは？ 「持続可能な社会のビジョン」というと難しいけれど、これなら身近な人と話せるかも。(村上千里)

特定非営利活動法人「持続可能な開発のための教育の10年」推進会議(ESD-J)

URL <http://www.esd-j.org/> e-mail : admin@esd-j.org

〒150-0001 東京都渋谷区神宮前5-53-67 コスモス青山B2F

TEL: 03-3797-7227 FAX: 03-6277-7554

● 会員募集中：正会員（10,000円）、準会員（3,000円）詳しくはHPをご覧ください ●

